修道生活を生きる

日本にキリスト教を伝えた宣教師フランシスコ・サビエルは、スペイン人でイエズス会の司祭である。

彼がローマのイエズス会本部に出した手紙は当時、未知の国、日本を紹介することになり、日本への関心を高めた。

これらの影響もあって、明治以降多くの司祭、シスターが来日した。

神への奉献生活を生きる修道者になることを「召し出し」というが、カトリックの修道者は結婚は許されない。

自分中心の利己的生き方がまん延している今、自分のためではなく、神のため他者のために生きる修道者への召し出しは減少している。

「鳥は飛ぶから鳥であり、人間は祈るから人間である」という言葉を聴いたことがあるが、祈りの人でもある修道者は、社会にとって非常に大切な存在だと思う。

前回、セビリアの観想修道会の日本人シスターを紹介した。

逆に、セビリアに生まれ育ちながら、日本で司祭として生活している人もいる。

その一人、光教会、柳井教会のアルティリヨ神父。小柄で、七十五歳になられたが、今春から光の二つの幼稚園に加え、下松暁の星幼稚園の園長としても活躍しておられる。

いつも笑顔で、日本人以上に日本を愛し、幼児を大切にされる姿に感銘させられる。

また長崎の日本二十六聖人記念館前館長の結城了悟神父もセビリア出身である。

つい先日、日本人司祭ら四人の殉教者についての本「男四人、道ひとつ」を出版された。

ニュースなどで報道されているように、今回、日本の百八十人の殉教者が列福されることになった。

その資料を作成したのが結城神父で、長年の調査によるこの功績は実に大きい。

ちなみに「結城了悟」という帰化名は一六三六年に殉教した日本人司祭「結城了雪」から取ったものである。

このほか山口県関係だけでもメディナ神父、パラシオス神父やシスターがたくさんおられる。

祖国から遠く離れた日本で、生涯のすべてをかけて生きるこれら修道者の生き方に深い感銘を覚える。

しかし、修道者だけが他者のために祈り、他者のために生きるのではなく、自分も修道者を鏡として生きなければならないと思いながら、それを肌で感じられる山口市の観想修道会、カルメル会を訪ねるのである。

そのカルメル会出身のセビリアのシスターに会うことができた今回の巡礼は、そのことだけでも私たち夫婦にとって、大きな恵みとなった。

夜九時を過ぎてからの遅い面会となったので、安全のため現地の日本人男性通訳に同行してもらった。心を満たされ、ホテルに帰ったのは夜十一時近かった。

翌朝はホテルを八時に出発。有名なスペイン広場のタイルによる五十八基のスペイン各地の歴史が描かれたベンチを見た。

こうして南スペインをあとにポルトガルに向かったのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

タイルに描かれたスペインの歴史の一つ「アルハンブラ落成」はイスラム最後の拠点、グラナダのアルハンブラ宮殿を明け渡すところ

幼稚園の夕涼み会のアルティリヨ神父